

氏 名	ソウ 曹	エイ 永	ケイ 慶
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 132 号		
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
研 究 科・専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻		
学位論文題目	モノの形態に対するイメージの実証的研究 —道具の使い方におけるイメージを中心に—		
審 査 委 員	(主査) 教 授 山 内 陸 平 教 授 山 口 重 之 教 授 古 山 正 雄		

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、モノの形態に対するイメージに関する実証的研究として数多くの調査を行ない、形態とイメージとの関係を考察したものである。

現在はイメージの時代とも言われる。このことは、社会や経済の成熟とともにモノの成熟度が増した今、モノの機能的価値よりもイメージを中心とした情報的価値が重要であることを意味している。換言すれば、市場における購買の動機を決定づけるものは、モノの持つ意味（イメージ）に左右される。従って、企業はモノの開発において、製品が担う意味やイメージといった抽象概念の形成に努力を払われなければならない。

工業製品のデザインプロセスにおいて、最初にコンセプトを策定し、そのコンセプトに近い視覚的図像或いは言語的表現を集めることにより、イメージを明確にし、更にそれを形態要素に転換するかたちでデザイン活動を展開していくのがこれまでの一般的なプロセスである。この造形的なイメージを表現する手段として、今日では主に形容詞を用い、単にモノの形態の表層的部分を追求している。しかし、このようなアプローチでは、道具の一面性のみに注目したこととなり、本来重視すべきモノを使用する人間の基本的行為との関係を軽視したものであると考えられる。

本研究では、具体的に道具を使用する人間側の視点から、モノによって喚起される行為を表現するイメージ、即ち形容詞に代わって副詞的イメージを把握し、そのイメージがモノの形態と対応することを実証することができれば、というのが目的である。

本研究は、上述した研究の意義と目的にそって次のような内容で構成されている。

序章：本研究の目的と関連する既往研究について述べている。

1 章：基本的形態におけるイメージについて。

基本的形態を立方体から球に段階的に変化させた幾何学的形態とし、それらのイメージの変貌過程の事態を明らかにしている。このような普遍的形態についての考察は工業製品のイメージに関する基本的で重要な部分と考えられるが、今日まであまり明確な指標が存在しておらず、今後の指標となるように整理されている。

さらに、この基本的形態に対するイメージの差異を検証するために、日本・中国・韓国を対象にして、三国間の差異についての比較・検討も行なっている。

2 章：道具の形態におけるイメージの副詞的表現と形容詞的表現。

人間が「座る」という行為を取り上げ、そのための道具である椅子を事例として、座り方につい

てのイメージ、即ち座り方の副詞的表現と椅子の形態の関係について調査・分析すると同時に、椅子の形態とそのイメージの形容詞的表現の関係について調査・分析を行なっている。その結果を、道具の形態を介してイメージの副詞的表現と形容詞的表現の間の関係について考察している。

3章：副詞的イメージ及び形容詞的イメージと椅子の基本的寸法との関係。

椅子の形態を構成している具体的な要素である基本的寸法とそれらの間の諸関係などに着目し、それらと副詞的イメージ及び形容詞的イメージとの関わりについて考察している。特に、副詞を用いて表現されるイメージが、道具の造形に関わるどのような要素と具体的に関係しているかを明らかにしている。

4章：道具の使い方におけるイメージと形態。

本章では、3章までの考察結果を踏まえ、道具の形態について、今後のアジアにおけるデザイン行為とデザインされた形態に関する相互理解のための基礎的な資料を実証的に探り出すために、調査研究を中心に考察を行なっている。その内容は、日本・中国・韓国の三国を対象にし、最もシンプルな機能を持つ生活道具としての容器を取り上げ、その使い方のイメージの三国間の差異を検証している。その際、容器の使い方のイメージと好ましい形態との関係も分析・考察している。

結論：1章から4章までの調査・分析とその考察をまとめて、結論としての知見を述べている。

論文審査の結果の要旨

本研究は、工業デザインの分野におけるイメージの問題に関して、これまではややもすると形態の表層的な部分のイメージ、すなわち形態を形容詞で捉えたイメージが中心となっていたが、道具本来の目的である使用者（人間）の使い方のイメージに着目したところが一貫した視点である。この視点に立ち、調査対象を椅子といった具体的な道具から、基本的形態（幾何学的形態）、道具の形態（シンプルな道具）に至る幅広い対象物を文献或いはモデルを作成することによって定め、調査・分析・考察を行なっている。その結果、基本的形態に対するイメージの構造と今後のモノのデザインに応用可能なイメージに関する指標を明らかにしている。

椅子という道具を取り上げ、そのイメージとの関係について述べている部分では、座り方に潜在する意味構造、及び副詞的イメージと形態との対応関係を把握し、更に、椅子の形態とそのイメージの形容詞的表現及び座り方のイメージの副詞的表現の3者の対応付けが可能なことを示している。また更に分析の結果、形態要素としての寸法的な比例関係が形容詞的イメージよりも副詞的イメージと関わりの深いことを明らかにしている。これらは、第4章で行なった東アジアにおけるイメージの差異についての考察とともに独創性のある意義ある知見として、また、現実のデザインへの応用が可能なものとして評価できる。

本論文の内容は、学術論文2編（日本デザイン学会のデザイン学研究 vol. 42 1996と日本デザイン学会のデザイン学研究 Vol. 44 No1. 1997）、参考論文4編にまとめられている。これらの論文はいずれも申請者が筆頭著者である。